



Title	農業株式会社
Author(s)	濱田, 康行
Description	「農林経済」第9774号の巻頭言
Citation	農林経済, 9774, 1
Issue Date	2006-04-17
Doc URL	<a href="https://hdl.handle.net/2115/8403">https://hdl.handle.net/2115/8403</a>
Type	article
File Information	norin_9774.pdf



## 農業株式会社

農業を株式会社でやるという新しい事態が少しずつ進行しています。株式会社ということは社長がいて、その人の裁量で経営され利益は株主に分配されるのですが、それが従来型の農家を中心とした農業とどこが違うのでしょうか。

農家だってちゃんと経営はしています。生産の計画（何をどれくらい作るか）、原材料の仕入れとその費用の計算、期間中の仕事の手順、そして生産物の販売と利益の確保。何も変わらないようですが、違うのは利益の確保という目的の位置付けです。資本主義社会ではこれが第一位におかれ、他の様々な目的は次になる。しかし、それは悪い事でもなんでもなく当然なのです。なんとなれば、資本主義社会を律するのは競争であり、優劣は利潤率で計られるからです。弱い企業（利益のあがらない企業）は敗退します。

次に置かれる他の様々な目的がなんであるかは、実は産業の種類によって違います。そして、この様々の中に人類にとってとても大事な要素が入っているというのが農業の特徴です。そういえば、他の産業は、それが自動車であろうと化学産業であろうとすべて **Industry** ですが、農業だけは **Agriculture** で特別です。 **Culture** ですから何か文化的なものを含んでいる。食は文化といいますから、何かわかるような気がします。農業の持つ大事な役割は安全な食料の供給ですが、それだけにとどまりません。最近、注目されているのが環境維持効果です。荒地よりも耕作地の方が保水能力が高く自然災害に有効です。また、荒地より農村の方が景観上也優れています。北海道では、広大な耕作地が後継世代がないためにないために放棄される危険があるのですが、その場合でも荒地に戻さずせめて草地で維持しようと努力しています。

こうした農業の持つその他の要素が、農業が利潤原理で行われることで無視されてしまう、そうまでいなくても尊重される順位が下がってしまう。これが株式会社導入に反対する人々のホンネです。農業は昔から協業でやってきたのでコミュニティの存在は不可欠ですが、株式会社になったらそれも必要なくなる。つまり資本家・経営者が大量の農業労働者を雇い、彼らは季節毎に移動する。農家が農産物製造工場になれば、もはや農村を形成する必要もありません。農村には主のような人がいて鎮守の森があり、夏祭りがある昔からの物語があるのですが、工業団地にそうしたものは必要ないからです。これは生活空間と仕事空間の違いです。

もちろん、環境を大切にしている株式会社もあるし、人を大切にする企業もたくさんあります。しかし、企業である以上、それらは利潤を目指すという目的に劣位する。そうしないと競争に負けてしまう。環境にやさしく地域に様々な貢献をしても倒産してしまえばその経営者は失格です。最近では企業倫理とか、企業の社会的責任とかいうことが強く言われるようになり、そういう社会貢献型の企業を支援する運動もありますが、まだ、農業を株式会社の手で全面的に委ねて良いという段階ではない。もちろん、農家による農業経営の効率化を推進することは必要です。